

おのみち文学三昧

自己を見つめるということ
—道徳教育行き・フッサー現象学経由—

尾道市立大学 文化芸術学部
講師 島田 喜行

とき：2025年12月6日
ところ：しまなみ交流館

みなさんに伝えたいこと

人間は自分の誤りを自分で改めることができる his errors are corrigible。知的で道徳的な存在である人間の、すべての美点の源泉がそこにある。

人間は 経験と議論 によって by discussion and experience、自分の誤りを改めることができる。ただし、経験だけではダメである。経験をどう解釈すべきかを知るために、議論が必要だ。間違った意見や行動は、事実と議論〔論証〕 fact and argumentによってしだいに改められていく。しかし、人間を心底から納得させるには、事実と議論をはっきりと示してあげなければならない。事実を見ただけで意味 meaningがわかることはめったにない。その意味を理解するには何らかの 解説 commentsが必要なのである。

(J・S・ミル 『自由論』 齊藤悦則訳、光文社、2012年、53頁、下線は引用者による)



発表の終着点（結論となる主張）

人間が判断力を備えていることの真価は、判断を間違えたとき改めることができるという一点にあるのだから、その判断が信頼できるのは、間違いを改める手段をつねに自ら保持している場合にのみである。（同上）

道徳教育行き・フツサール現象学経由

自己を見つめることによって可能になる道徳的な生き方とは？

間違いを犯す（可謬的な）存在者であることを自覚すること
→生まれつき ポンコツ な私（たち）であることを認めよう！

間違いを自分（たち）で改めることができる手段を持つこと
→せっかくなので 優れもの な私（たち）になることを目指そう！



小・中学校における道徳教育

「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動」のこと

(文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説』特別の教科 道徳編』8頁)

道徳性

- ・ 判断力
- ・ 心情
- ・ 実践意欲と態度

道徳的価値

- ・ A 自分自身
 - ・ B 人(他者)
 - ・ C 集団・社会
 - ・ D 生命・自然
- 【内容項目】
中学校:22

自己

- ・ 内省(反省)
- ・ 自己理解を深める

広い視野

- ・ 多面的多角的
- ・ 多様な価値観
- ・ 対話協働

生き方

- ・ 人間とは何か
→人間に値する／人間に相応しい

高等学校における道徳教育

「『倫理』は、新設された必修科目『公共』で学習した主体的に社会に参画し他者と協働することに向けて選択・判断するための手掛かとなる概念や理論を活用するとともに、古今東西の幅広い知的蓄積を通してより深く思索するための手掛かりとなる多様な視点（概念や理論など）を理解し、それらを活用して、現代の倫理的諸課題を広く深く探究する活動を通して、人間としての在り方生き方についての思索を深めていく選択科目」のこと

（文部科学省高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説『公民編』85頁）

道徳性

- 判断力
- 心情
- 実践意欲と態度

人生観

- 人間としての在り方生き方について思索するための手掛かり

倫理観

- 人間としての在り方生き方について思索するための手掛かり

世界観

- 世界と人間の在り方について思索するための手掛かり

清水書院

『高等学校新倫理』

令和7年 124頁

実業出版

『新述倫理』

令和7年 119頁



3 世界と存在そのものへ —— 現象学

現象学的還元と生活世界

▶ フッサール

実存主義は、20世紀のドイツ

やフランスにおいて、現象学と

いう学問を理論的な支えとして大きく発展した。現象学とは、さまざまな先入見を排して、事実の真の姿、「事象そのものへ」迫るための理論である。この現象学を創始したのは、ドイツの哲学者フッサールである。

フッサールによれば、人間の意識にはつねに、対象に向かい、世界を意味づけるというはたらき(志向性)がある。現象としての世界は、このような意識の作用とのかかわりにおいて存在しているのである。しかし、私たちのふだんの態度(自然的態度)では、世界と意識とのあいだのそうした基本的な関係が反省されない

ままである。そこで、フッサールは、世界の存在についての判断をいったん停止し(エポケー)、意識と世界の本質的なかかわりを厳密にとらえなおす作業(現象学的還元)を試みた。

フッサールは、くり返し現象学的還元の方法論を改良しようとしたが、最晩年には自然的態度の意義を見なおして、科学的に計量される手前の、日常的に経験される「生活世界」に、まず立ち返るべきことを説いた。こうしたフッサールの晩年の思想からとくに影響を受けたのは、のちにふれるメルロ＝ポンティである。

フッサール

プロスニッツ生まれのユダヤ系哲学者。現象学を創始し、フライブルク大学教授に就任する。晩年はナチス政権に冷遇され、不遇に終わった。主著『イデー』

◆現象学の成立◆この時代、哲学の新しい潮流として現象学があらわれた。ドイツのフッサールを創始者とする現象学は、哲学者の文献の再解釈ではなく「事象そのものへ」目を向ける。

「事象そのもの」といっても、現象学が考える事象は、日常的に観察されるものをさすのではない。むしろ、日常の我々は事物に対してすでに特定の態度(自然的態度)で接して「事象そのもの」を覆い隠していると現象学は考える。

目の前にある「りんご」は、まずはさまざまな質をともなった現実の断片としてあらわれているのであり、最初から「りんご」としてあらわれているのではない。それを「りんご」と意味づけるのは、我々の意識の志向性であるとフッサールは考えた。ものを意味づけて考える自然的態度を一旦括弧に入れ(エポケー)、対象と意識の関係を精査する現象学的還元とよばれる方法が、現象学の中核とされた。

意識が対象を意味づける構造を精査するなかでフッサールはやがて、意識自体の成立の問題に取り組むことになる。人間によって生きられる生活世界の分析は、やがてフランスの哲学者メルロ＝ポンティへと受け継がれ、自己の身体が成立する過程を問う身体現象学として展開されることになった。

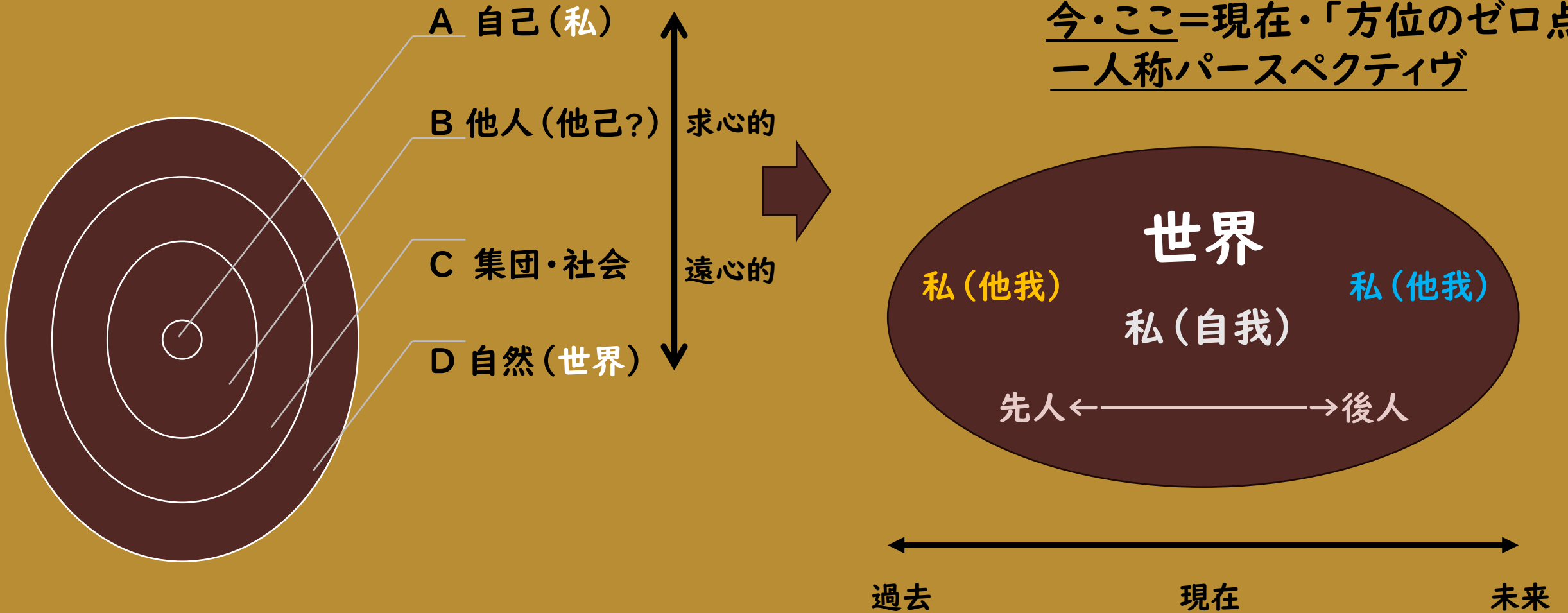
●フッサール 現象学を創始したドイツの哲学者。主著『イデー』『デカルト的省察』

高校 倫理の教科書

道徳的価値と自己—世界の中心としての私—

【キーワード】：私の「各私性」

今・ここ=現在・「方位のゼロ点」
一人称パースペクティヴ



フツサールの教え：意識の「志向性」

生の秘密1：一人称パースペクティヴ

→ 今・ここから、私が眺めることとともにさまざまものが私に立ち現れてくる (=「現象する」) ということ

さまざまなものって何？

→ 山田先生がゼミ生に対して「光る君と六条御息所」のただならぬ関係について話している、という場面を想像してみよう！

→ **存在の仕方**に注目：このとき、山田先生、ゼミ生、光る君と六条御息所は、どのように、あなた(私たち一人ひとり)に立ち現れているのでしょうか？

さまざまなものに関する三分類：「**実在的**」：特定の時間位置・空間位置に在る
（「**存在者**」）

「**理念的**」：あらゆる時間・空間に在る

「**中立的**」：疑似的な時間位置・空間位置に在る（昔々、あるところに……）



フッサールの教え：意識の「志向性」

生の秘密2：現象がもつ「媒介・突破」構造

→ 一にして同じものは、多様な現れを「媒介」・「突破」
(・経路)して私(たち)に現象するということ

→ 前に投影されているスライドの見え方に注目：

一人称パー
スペクティヴ
による制限

私たちは、時間位置を同じにすることはできる
しかし、空間位置を同じにすることはできない



当たり前のことだが、厳密に言えば、一人ひとりスライドの見え方は異なっている
見え方が異なっているにもかかわらず、なぜ私たちは、「今、同じスライドを見ている」
と思っているのか／思えてしまうのか？



フッサールの教え：意識の「志向性」

生の秘密3：同じものでありかつ異なるものが現象する
→私たちは、一にして同じものを見ているようで、じつは見ていないということ

→立ち現れているものの中身に注目：

「光る君と六条御息所」 ← 誰？ 「ひかるくんと六条さんとこのご息女？」 / ← 何のこと？

○ 中身のつまり具合（すっかすか「空虚」orぎっちぎち「充実」）は、人それぞれ十人十色

同じもの : 専門家が見ているもの → 『源氏物語』 ← 素人が見ているもの

異なるもの: 専門家に立ち現れていること ← 『源氏物語』 → 素人に立ち現れていること

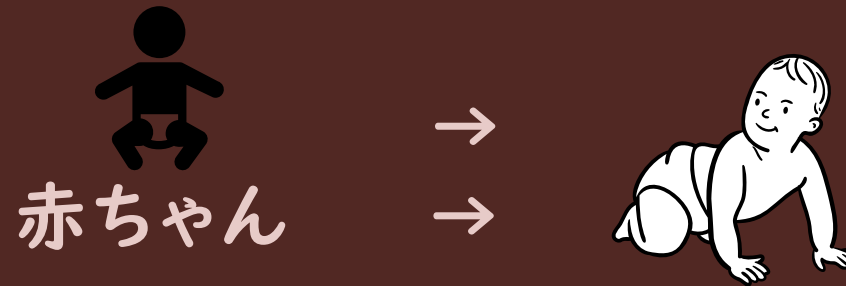
【注意】: 専門家がつねに正しいということではなく、専門家である / になるために修めるべき作法があること



フッサールの教え：意識の「志向性」

意識の「志向性」：「意識とはつねに何ものかについての意識である」

あるものが、その多様な現れを媒介・突破して、
何ものかとして、私に、立ち現れてくること



【キーワード】：「志向的体験」の三項構造

〈私—私の意識の働き（意識作用）—働きによって立ち現れたもの（志向的対象）〉

当たり前前のことを当たり前前のままにせず、意識（の基本構造）に着目して、
この当たり前前がもつ不思議を解明しようとする学的な試みが現象学

フッサールの教え：「現象学的還元」

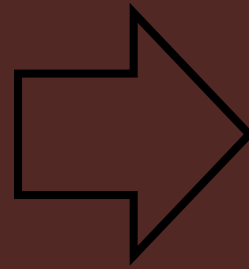
問い：当たり前前のことを当たり前前そのまま済ませないために、意識に着目するって？

答え：「現象学的還元」という特殊な手続き（方法）を考案した ← すごく不自然なこと

当たり前前の生（日常の生）

私たちが気にしていること

世界のなかに在るさまざまなもの
今、見ているプリント
聴いている声
考えている内容



眼差しの
向け変え

当たり前を問う生（非日常の生）

私たちがとくに気にしていないこと

私の意識のなかに在ること
今、見ているという意識の働き
聴いている私
考えている私

問い：この私の意識へ眼差しの向け変えを
一般的にはなんと呼ぶ？

答え：反省（自己を見つめること）

日常の生

〈私—意識作用—志向的对象（媒介・突破・経由）〉 世界のなかに在るさまざまなもの

反省の生

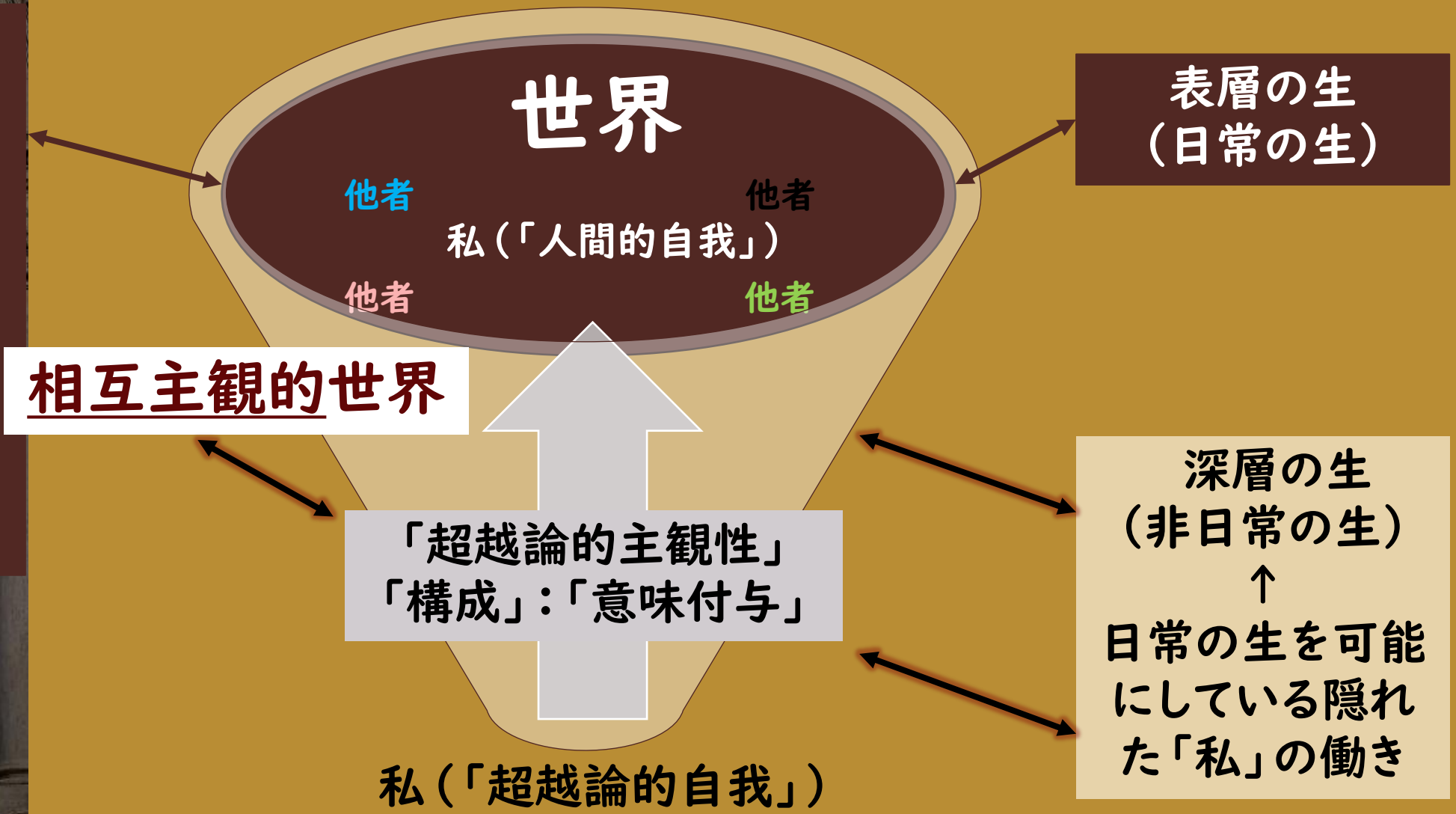
〈私—意識作用—志向的对象（媒介・突破・経由）〉 ← 世界のなかに在るさまざまなもの

疑問：現象学って反省によって眼差しを向け変えて、自分の意識を探究する
だけなの？ これだけだったら、とくに目新しいこともないんだけど……

フッサールのにとっておきの教え：「表層の生」と「深層の生」



世界
=客観的世界
↓
多くの人が私と共に
生きている世界
↑
世界や多くの人を
私が構成する？
私って神？



まとめ・振り返り・補足

道徳教育行き・フッサール現象学経由

自己を見つめることによって可能になる道徳的な生き方とは？

間違いを犯す(可謬的な)存在者であることを自覚すること

間違いを自分(たち)で改めることができる手段を持つこと



出典:

HUSSERLIANA (フッサール全集)

- Bd. III/1: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologische Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie.* Neu hrsg. v. Schuhmann, K., 1976.
- Bd. VI: *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie.* Hrsg. v. Biemel, W., 1954.

おすすめの文献 (日本語で読めるもの)

【現象学にかんするもの】

- ダン・ザハヴィ『フッサールの現象学 (新装版)』工藤和男、中村拓也訳、晃洋書房、2017年
- 田口茂『現象学という思考—〈自明なもの〉の知へ— (筑摩選書 0106)』筑摩書房、2014年
- 谷徹『これが現象学だ (講談社学術新書 1635)』講談社、2002年
- ゲルト・ブラント『世界・自我・時間—フッサール未公開草稿の研究—』新田義弘、小池稔訳、国文社、1982年

【現象学以外のもの】

- 小笠原喜康・他編著『哲学する道徳—現実社会を捉え直す授業づくりの新提案—』東海大学出版部、2017年
- 柴原弘志・他著『中学校 新学習指導要領 道徳の授業づくり』明治図書、2018年
- 児玉聡『哲学古典授業 ミル『自由論』の歩き方 (光文社新書 1339)』光文社、2024年